

近畿地方の万葉集と風景画シリーズ（第二十九回）

いもやま　せやま
「妹山・背山」

・古代、大和国から紀伊の国へと旅する際に国境の真土山（本シリーズ第二十八回に掲載）を超え西へ約二十五キロ、和歌山県北部に位置する、伊都郡いとかつらぎ町あたりで、和歌山県の北部を西流し瀬戸内海の一部である紀伊水道に注ぐ「紀の川」を挟み北岸に背山（標高168m）と対岸に妹山（標高124m）が相対して仲良く並ぶ。

・大和から紀伊に向かう古代の宮廷人たちは、仲良く並んだ二つの山の名を故郷を思う気持ちと強く結びつけて男女に例え「男を背山」「女を妹山」と称し、夫婦や恋人にたとえた歌を多く残しており「万葉集」には故郷への恋しさを募らせた次の歌など十五首と多くが詠まれている。

わぎも　こ　あ
1) 我妹子に　我が恋ひ行けば

とも　なら　を
羨しくも　並び居るかも

いも　せ
妹と背の山

作者　未詳（巻七―一二一〇）

（解説）故郷・大和に残してきた妻のことを恋しい思いで旅路を行くと「妹の山」と「背の山」が並び立っていて羨ましい限りである。

2) 妹があたり 今そ我が行く 目のみ

だに 我に見えこそ 言間はずとも

作者 未詳 (巻七―一二二)

(解説) 私は今、妹山の辺りを歩いている。懐かしい故郷の妻よ、せめて顔だけでも私の前に見せておくれ。言葉まではかわせなくとも。

(参考文献) 日本古典文学大系、村瀬憲夫著「万葉の歌」等

(写生地) かつらぎ町を通る国道24号線沿いの「道の駅・紀の川万葉の里」から西に曲がりくねりながら流れる「紀の川」と北岸(右岸)に「背山」、南岸(左岸)に「妹山」を描く(杏花)

